

2025 年 令和 7 年度

東京藝術大学 大学院美術研究科 絵画研究科版画専攻

博士論文

ポスト・デジタル時代におけるアイデンティティのクリエーション

CREATION OF IDENTITY IN THE POST-DIGITAL AGE

舒 頤

(ジョ ガン)

学籍番号 1322906

主査 ミヒヤエル・シュナイダー 教授

論文第一副査 川瀬智之 教授

作品第一副査 三井田盛一郎 教授

作品副査 小瀬村真美 准教授

外部副査 岩崎秀雄 教授

# ポスト・デジタル時代におけるアイデンティティのクリエーション

## CREATION OF IDENTITY IN THE POST-DIGITAL AGE

### 目次

#### 序論

#### 研究マップ

#### 第一章 自己のアイデンティティに関する疑問

##### 第一節 わたしの名前について

##### 第二節 これは「わたし」ではない！ - 鏡像と写真にうつるわたし

##### 第三節 わたしはわたしの意思で書いている？ - 印刷物と臨書とわたし

#### 第二章 顔とアイデンティティをめぐる美術史

##### 第一節 肖像（ポートレート）に対する思考

##### 第二節 自画像とセルフ・ポートレートの中にある顔

#### 第三章 アイデンティティのクリエーション

##### 第一節 わたしはいかにわたしを証明すべきか：社会制度におけるアイデンティティの喪失

- 証明写真と顔 自作：《Who am I?》

##### 第二節 テクノロジー環境でのアイデンティティの構築

- 他者と対談 自作：《Where are you from?》、《恍惚・Trance》
- ビッグデータシステムを騙す 作品：《UP UP DOWN DOWN》
- バーチャル世界で生きる実験 作品：《Do my feet touch the ground?》

##### 第三節 生命体であるわたしはなぜわたしであろう？：受動的な個体

- 自作：《The Matrix of Identity》

#### 第四章 わたしをデジタル・クローン化していく

##### 第一節 生成AIが新たにアイデンティティを作れるか？

##### 第二節 博士提出作品《What Makes an “I”?》の解説

### 結論

### 参考文献

### 図版出典

### 謝辞

## 序論

わたしは1990年代末期に中国・湖北省の武漢で生まれ、2017年から東京で研究と生活を続けている。都市の建設とともに、成長環境や生活様式も次第に変わつていった。わたしはその地域に生まれ、その土地の言語や文化の影響を受けたが、一方で両親はそれぞれ別の故郷を持ち、20歳前後で武漢に移り住んで働き、のちに定住した経緯がある。彼らは今でも出身地の方言を保ちながら、わたしとの日常会話では主に武漢方言を使っている。さらに、外来文化の影響を受けつつ、わたしの認識にも大きな影響をもたらした。こうした環境で育ったわたしにとって、「出生地」、「言葉」、「生活様式」、「文化」など、従来アイデンティティを語るうえで大きな要素とされてきたものが、果たしてどこまで個人のアイデンティティを決定づけるのか疑問に思うようになった。

本論では、わたしの成長過程を出発点として、デジタル技術が急速に浸透しつつある現代、いわゆる「ポスト・デジタル時代<sup>1</sup> (Post - Digital Age)」における自己のアイデンティティ (identity) の在り方を考察する。

「アイデンティティ」という単語は、ラテン語の「idem (アイデム)」(「同じ」という意味) に由来し、日本語では「自己同一性」と訳される。心理学において、エリク・H・エリクソン (Erik Homburger Erikson) は『アイデンティティとライフサイクル (Identity and the life cycle)』の中で、次のように述べた。

「パーソナル・アイデンティティを持っているという意識的な感覚は、同時に生じる二つの観察に基づいている。一方は、<sup>セルフセイムネス</sup>自分自身の<sup>コンティニュイティ</sup>斉一性と時間の流れの中での<sup>コンティニュイティ</sup>連続性を直接的に知覚すること。他方は、それと同時に、自分の<sup>セイムネス</sup>斉一性 (あるいは自己同一性) と<sup>コンティニュイティ</sup>連続性を他者が認めてくれているという事実を知覚すること。わたしが自我アイデンティティという言葉によって提示したいのは、パーソナル・アイデンティティという言葉で示されるような、単に存在しているという事実以上のことである。つまり問題は、この〔自分が〕存在するということの自我性質なのである。」<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 本文において、ポスト・デジタル時代 (Post - Digital Age) とは、デジタル技術が社会において普遍化され、日常生活や文化的制度の基盤として前提化された時代を指す。

<sup>2</sup> エリク・H・エリクソン (Erik Homburger Erikson) 『アイデンティティとライフサイクル』、西平直、中島由恵訳、誠信書房、2011年、7ページ。

と強調した。

一方で、文化人類学的な文脈では、陳天璽 [他] 編著の『越境とアイデンティフィケーション：国籍・パスポート・ID カード』<sup>3</sup>によれば、アイデンティティは「自己同一性」や「帰属意識」と訳され、「自分は何者か」ということの本質を追及するものである。また、アイデンティフィケーション (identification) は、一般にパスポートや ID カードといった具体的なモノを通して個人への識別手段を指している。

くわえて、テクノロジーの飛躍的な革新とデジタル技術の進展により、世界規模のコミュニケーションが日常化した現代は、「リアルタイムに情報が行き交う共同体」へと変貌しつつある。さらに、ポスト・デジタル時代の到来を受け、アイデンティティは現実世界とバーチャルリアリティとのあいだでいかに表象されるのかという根本的な問いに直面することになった。もはや、アイデンティティの問題は、わたし（生命体）だけに専属する概念にとどまらない。メタバースにおいてアイデンティティが生成される可能性が高まり、非生命体でもある方法で独自のアイデンティティを持ちうるかもしれない。未来においてアイデンティティは、人間や動物といった生物の領域を超える、ある種の「宇宙的」次元にまで拡大していくと考えられる。もしかすると、あらゆる物体や存在がそれぞれのアイデンティティを形成・所有する未来が訪れ、人のアイデンティティに関する問いは、ますます広大なものへと変容していくのではないだろうか。

本論では「クリエーション」という行為を、アイデンティティの単なる表出としてではなく、その生成を可能にする関係的かつ動的な過程——すなわちアイデンティフィケーション——として再定義することを核に据える。言い換えれば、本論における「アイデンティティのクリエーション」は「アイデンティティの生成」とも訳される。ポスト・デジタル時代において、自己とはもはやあらかじめ与えられた本質的存在ではなく、デジタル技術に媒介される複数の文脈において、他者との関係性、制度へのまなざし、メディア環境のなかで絶えず構成され続けるものである。こうした視点に基づき、本論文ではわたし自身の作品制作という実践を通じて浮かび上がるアイデンティティに関する諸問題について論じる。アイデンティティには、生得的な認知過程としての側面、社会制度の中で形成される外的構造としての側面、そしてテクノロジー環境での相互関係における側面が存在する。これら三つの側面を軸として、ポスト・デジタル時代の芸術制作を通じて浮

---

<sup>3</sup> 陳天璽 [他] 編著、『越境とアイデンティフィケーション：国籍・パスポート・ID カード』、新曜社、2012 年、2 ページ。

かび上がる「アイデンティティのクリエーション」の可能性を探求していく。

本論の構成は以下となる。

第一章では、幼少期から日本に留学する前に至るまで、筆者が生まれた時代の変遷に伴って外部から受けてきた情報の影響、そして鏡や写真に映る自己像への違和感を手がかりに、自己アイデンティティ形成の初期段階と、その後の成立・変容のプロセスを探求する。具体的には、ジャック・デリダ (Jacques Derrida) とジャック・ラカン (Jacques Lacan) の理論、スザン・ソンタグ (Susan Sontag) の『写真論』といった著作を参照しつつ、「表象的な顔」とアイデンティティの関係性を明らかにする。さらに、印刷物や複製メディアが、筆者のコミュニケーションや認知活動にどのような作用をもたらすかについても考察する。また、筆者が小学校時代から続けてきた臨書や絵画の模写といった模倣行為を通じて、個人的アイデンティティとアートとの関連性がどのように揺さぶられるかを検証する。こうした複製メディアの影響や模写による体験が、「唯一無二」と信じていた自我にどのような影響を与え、「アイデンティティの唯一性」を喪失・再構築するきっかけとなりうるのかを論じていく。

第二章では、主に他のアーティストの作品を対象に、美術史的かつ理論的な観点から「顔」とアイデンティティの関係を探求する。肖像画と肖像写真、自画像とセルフポートレートという二つの節に分け、具体的な作品分析を通じて、「顔」がアイデンティティをいかに可視化し、制度化し、あるいは解体するのかを検討する。また、ロラン・バルト (Roland Barthes) 『明るい部屋』、ハンス・ベルティング (Hans Belting) 『顔の歴史』といった著作を参照しつつ、「顔」と「アイデンティティ」の関係性を明らかにする。本章の考察を通じて、「顔」という可視的な表象が文化的・社会的コードの書き込みと抹消の場となること、さらにはアイデンティティが固定的な実体ではなく生成的なプロセスとして現れることを示す。

第三章では、2017 年にわたしが日本に入国した際に、正式な書類に誤った名前を記入したという個人的な出来事を通じて、社会的および制度的に構築されるアイデンティティの問題を考察する。具体的には、ジャック・デリダの観点に基づき、名前の変更という出来事がいかに自己の存在や意味を制度的に再編成するかを分析する。また、2018 年に身分証明書類を紛失した経験を通じ、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) の理論に基づいて、個人のアイデンティティが制度化された文書や印刷物によって規定されるプロセスを分析する。さらに、他者との相互関係やバーチャル空間での 3D スキャン、ビッグデータを欺く試みなどの作品制作を通して、デジタルメディア環境下におけるアイデンティティの再構築プロセスを明らかにする。この環境の中では、わたしはアイデンティティの創造者であり、消費者でもある。ジャン・ボードリヤール (Jean

Baudrillard) が『シミュラークルとシミュレーション』<sup>4</sup>で論じた「シミュラークル (simulacre)」という概念が、筆者自身のアート研究と作品にいかに関連しているかを述べる。ポスト・デジタル時代におけるアイデンティティの不確実性について述べるとともに、今後アイデンティティをいかに再定義、再構築するかについて論じる。

また、ポスト・デジタル時代へと移行する中で、従来の制度や技術手段によって人のアイデンティティを認識する手段は、急速に不十分になりつつある。こうした制度的・技術的手段の限界に対し、より根源的なレベルからアイデンティティを再考するために、生命科学の視点が必要になる。生命科学の観点から「生命体としてのわたし」のアイデンティティの原点を探ると、個人はそれぞれ独立した唯一無二の存在である一方で、生命科学的な系譜においてはすべての人類が共通の祖先を持つという推測が可能になる。このことは、アイデンティティの特殊性を解消する可能性をはらんでいると考えられる。筆者自身の作品《The Matrix of Identity》では、生命科学的な視点からアイデンティティの受動性や共通性を示唆するとともに、前述のように、生命体と非生命体のあいだに生じる新たなアイデンティティ認識についても論じる。

第四章では、AI 技術によるアイデンティティの可能性を検討し、わたし自身の実践してきた AI 作品とその思考を論じる。また、博士審査展の提出作品《What Makes an “I”?》では、筆者自身の言語表現、生活習慣、顔貌、声といった多様な個人データを AI に学習させることにより、「拡張された自己」としてのデジタル・クローンを生成することを試みている。生成されたふたつの「わたし」は、記憶や表現スタイルを引き継ぎつつ、同時に AI の生成能力によって膨大な情報ネットワークと接続され、元々のわたしと異なる新たな存在として構成される。さらに、鑑賞者が展示空間やオンライン上で自身の情報をアップロードすることで、それらのデータが一人の「わたし」と融合し、変容されていく。こうして生成された多様的な「わたし」同士は、作品内で永続的に自己と対話を繰り返す。さらに、鑑賞者が展示空間やオンラインを通じて自身のデータを提供することで、それらが一方の「わたし」と融合し、自己像はさらに拡張される。こうして生成された多様な「わたし」同士は、作品内で永続的に対話することを述べる。

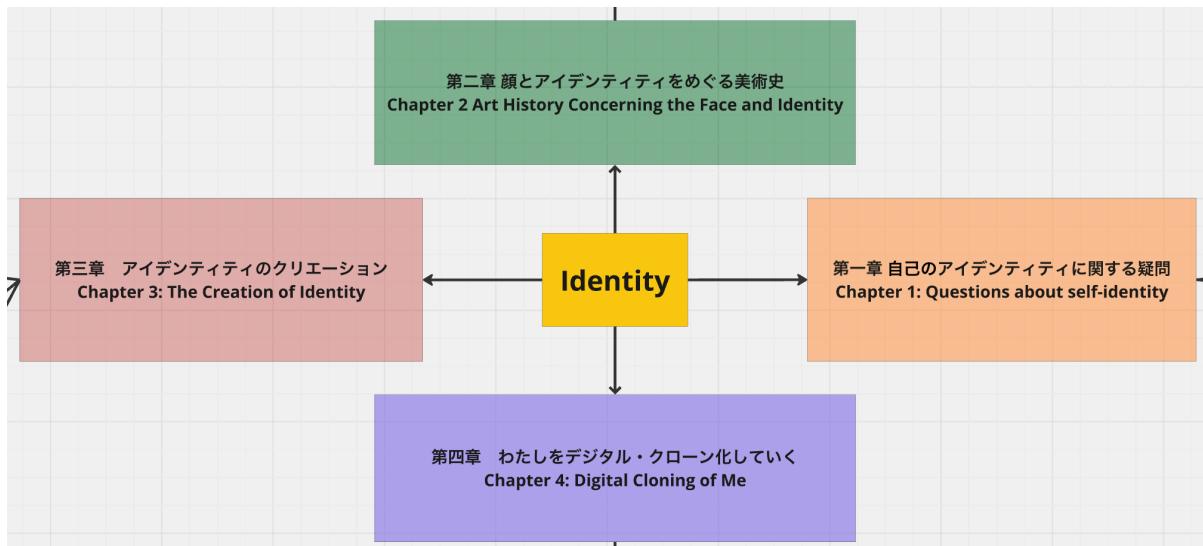
ポスト・デジタル時代においては、アイデンティティは固定的で一貫したものではなく、情報の編集、統合、複製によって常に構築・再構築されうる「生成的プロセス」である。鑑賞者によって「わたし」の輪郭はさらに不定形となり、個としての境界が曖昧化するなかで、情報社会におけるアイデンティティの制度的条件とその可塑性についての新たな視座を提示している。

---

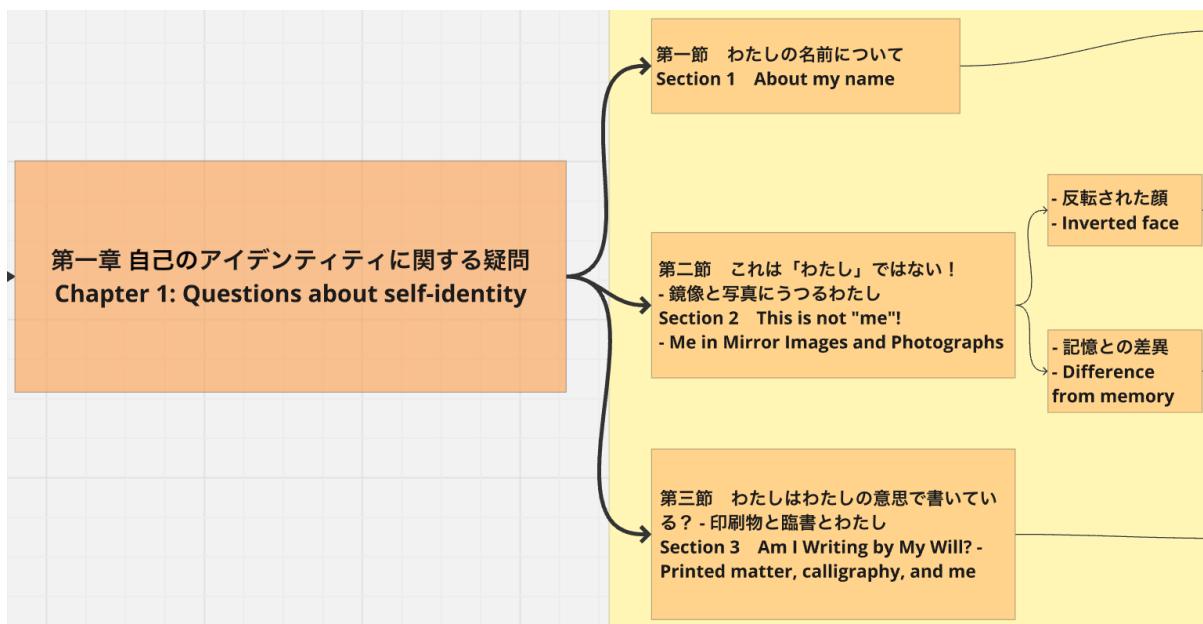
<sup>4</sup> ジャン・ボードリヤール『シミュラークルとシミュレーション』竹原あき子訳、法政大学出版局、2008 年。

これらの議論を通じ、本研究は、アナログとデジタル、現実とメタバース、そしてローカルとグローバルが交錯するポスト・デジタル時代において、アイデンティティがどのように再解釈され、クリエイトされ得るかを明らかにすることを目的としている。

## 研究マップ



研究マップの全体図



第一章の全体図

## 第一節 わたしの名前について Section 1 About my name

舒顔=父（舒）と母（顔）の姓を組み合わせたものだった  
SHU YAN = was a combination of father (SHU) and mother (YAN) surnames  
↓  
文化環境において、習慣であるもの  
What is customary in the cultural environment  
↓  
「舒顔 (SHU YAN)」は英語において  
=> 「YAN SHU」になる  
SHU YAN" in English => "YAN SHU"

第一節の大旨

## 第二節 これは「わたし」ではない！ - 鏡像と写真にうつるわたし Section 2 This is not "me"! - Me in Mirror Images and Photographs

- 反転された顔  
- Inverted face  
- 記憶との差異  
- Difference from memory

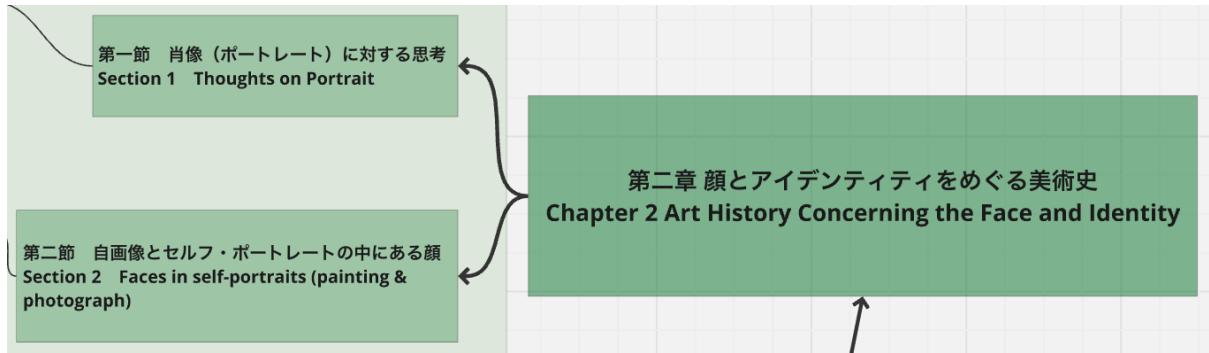
"鏡像"  
"Mirror image"  
↓  
「自分らしくない」 I don't feel like myself.  
↓  
わたしの「本当の姿」とは何なのか  
What is the "real self"?  
↓  
写真=>証拠  
記憶=>鮮明・不鮮明  
Photograph=>evidence  
Memory=>clear, unclear  
↓  
ポスト・デジタルにおける、AI生成によって写真是  
不真実なものになる  
In Post-Digital Age, AI Generation Makes Photography Untruthful

第二節の大旨

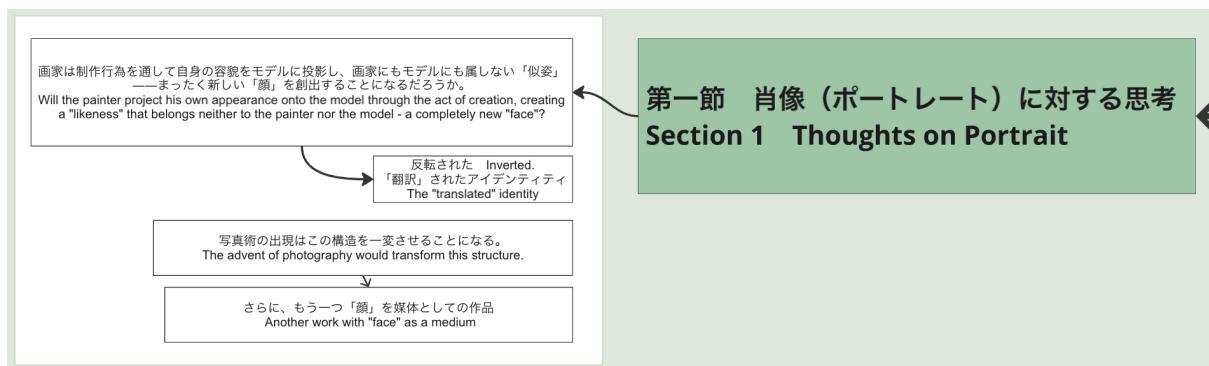
## 第三節 わたしはわたしの意思で書いている？ - 印刷物と臨書とわたし Section 3 Am I Writing by My Will? - Printed matter, calligraphy, and me

書道臨書  
calligraphy writing (from book)  
↓  
「模倣的 (imitative)」  
「非模倣的 (non-imitative)」  
↓  
リプレゼンテーション (Representation)  
「aura」を喪失 Loss of "Aura"  
↓  
文化環境において自己のアイデンティティが形成・表現  
Identity is formed and expressed in a cultural environment

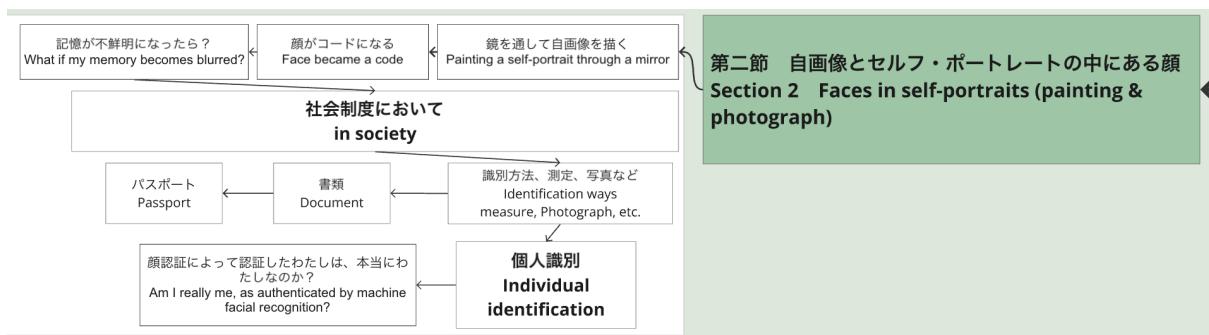
第三節の大旨



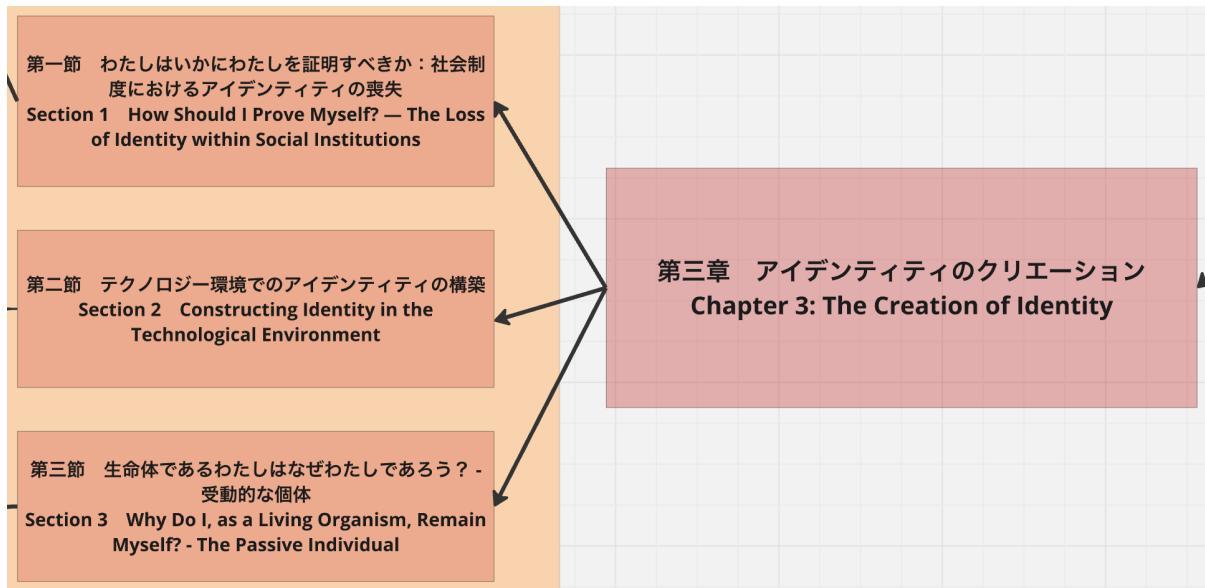
第二章の全体図



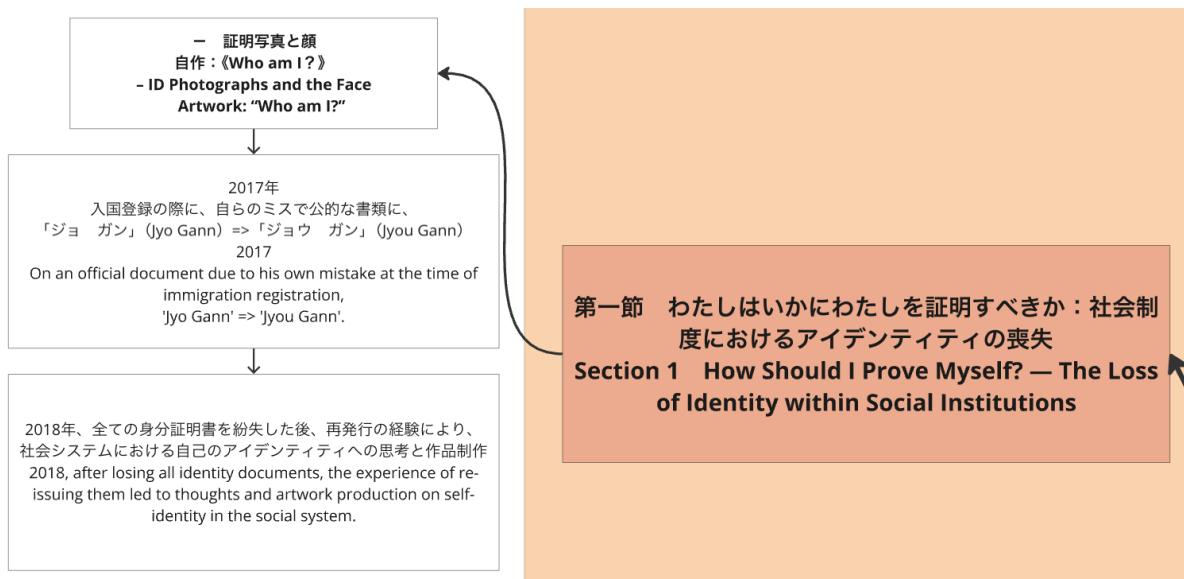
第一節の大旨



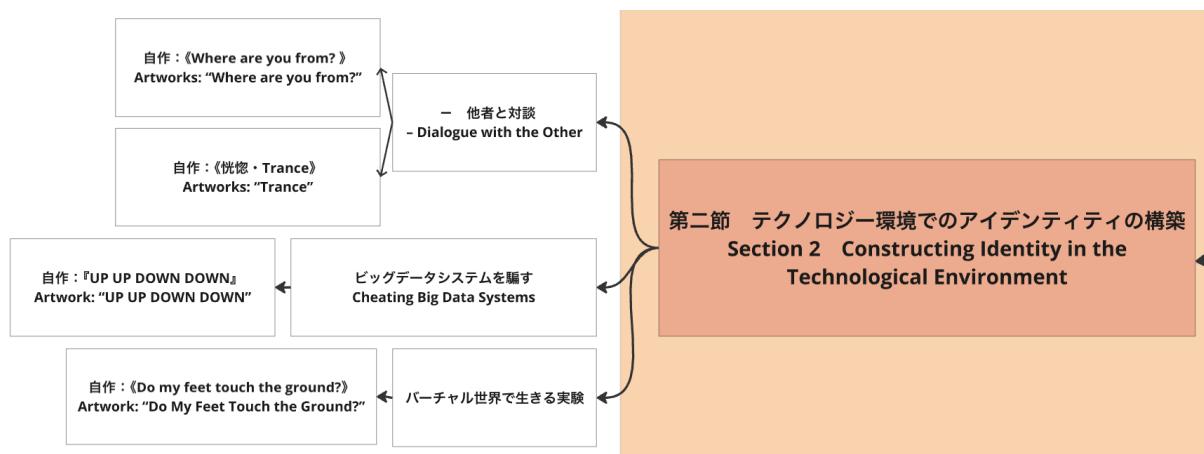
第二節の大旨



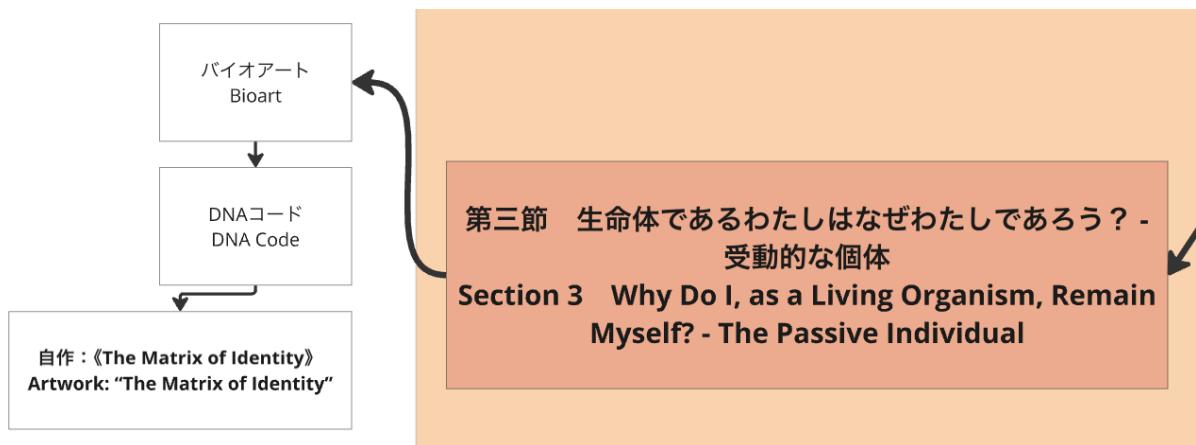
第三章の全体図



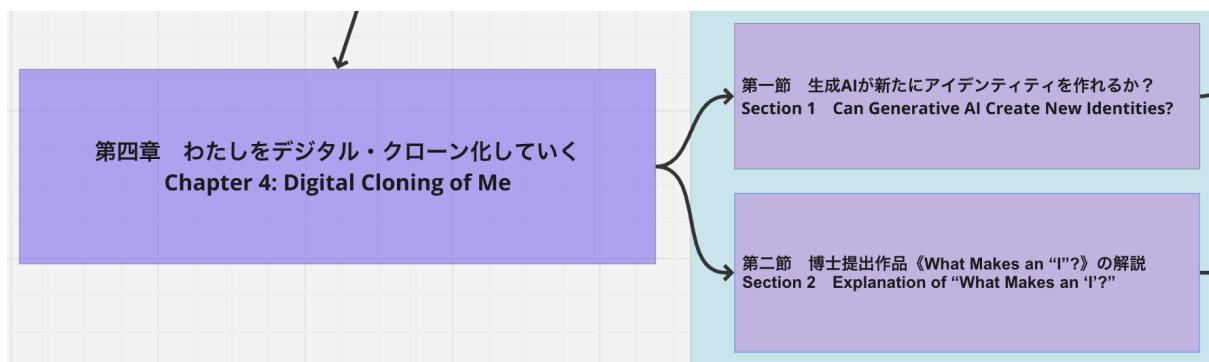
第一節の大旨



第二節の大旨



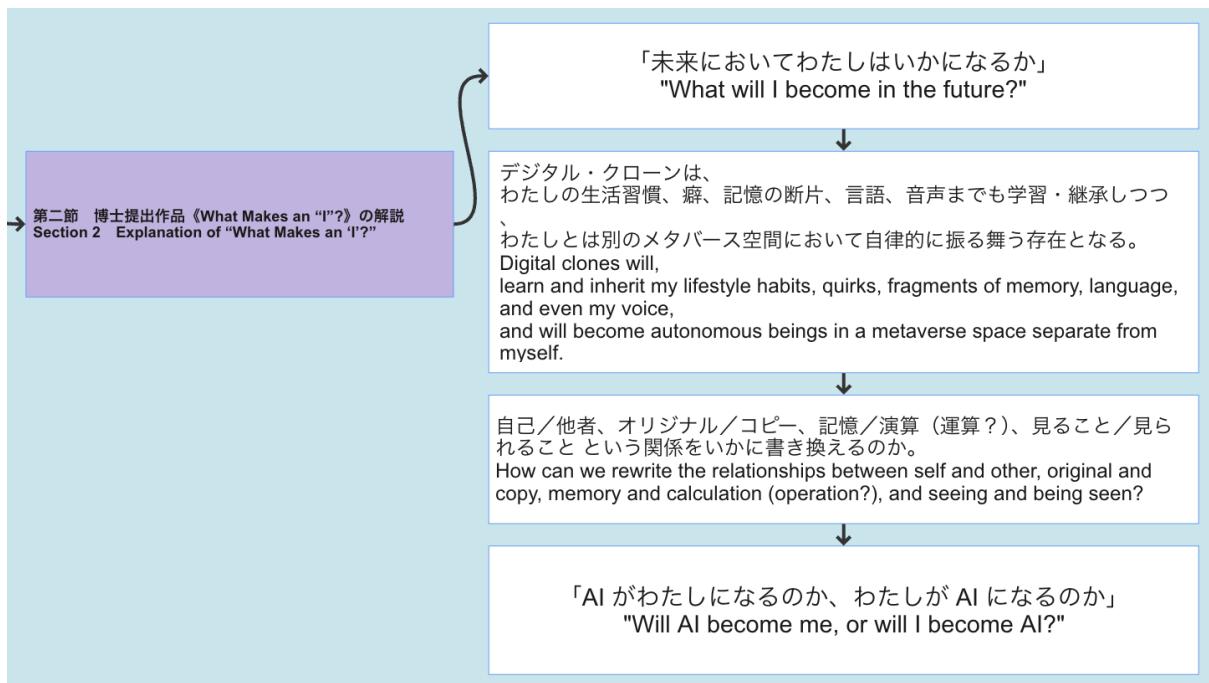
第三節の大旨



第四章の全体図



## 第一節の大旨



## 第二節の大旨